
神のみぞ知るセカイ ～女神と悪魔と水着～

木国 多夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神のみぞ知るセカイ ～女神と悪魔と水着～

【Nコード】

N4194BA

【作者名】

木国 多夢

【あらすじ】

神のみぞ知るセカイの二次創作小説です。かなり短編で、時期は夏ですが原作の時系列は無視しています。

「みんなで海にいきましょうー！！！」

「……は？」

今日はなぜかいろいろな偶然が重なって、天理、かのん、月夜、結、栞、歩美、ハクアがカフェ・グランパに集っていた。

夏が始まり、暑くなって来ているので水が恋しくなってきたのはいいのだが、ここにいるメンバーはあいにく現代っ子なので海よりエアコンの方が快適でいい。

「ちよつとエルシイ？ いきなりどうしたの？」

「ちよつとテレビで特集をしてたんですよ！ それで人間界に来てから海で泳いでないなーって思ってた！」

「それはそうだけど……」

ハクアはちらりと桂馬のことを見てから、女神がその身体に宿っている少女たちに視線を移す。

「なんでこのタイミングで言うの。」

桂馬に聞こえない程度の声でぼそぼそとそう言った。

「だってみんなで行った方が楽しいですよ！ テレビでも大人数で行った方がいいって言ってました！」

それもそうなのだが、この面子で行くと絶対に修羅場を見ることになるってしまうのは分かっているのだろうか？

なにせ自分とエルシイ以外は全員桂馬が二度も攻略した女子たちなのだ。しかもそれぞれキスマスまでしてしまっているのだ。

「ボクも行っつていいのかな？」

「当たり前ですー。みなさんも一緒に行きましょう！」

し、しかしいきなり海に行こうと誘われたって彼女達も心の準備というものがあるはずだ。

「わ、私は水着なんて……」

「お仕事大丈夫かなー？」

「う、海など行きたくないのですね！」

「……………」

「私は陸で遊ぶ方がいいな！」

「どうやらかのんと結とハクアは行く気らしいが、それ以外は水着が着たくないらしい。」

「まあ、当然だ。いまどきの女子が自分から水着を着たがるわけがない。」

桂馬はPFPの画面を見て、関係ない事だとしてゲームに没頭する。

「テレビで言ってたんですけど、思いの人に水着を見せると恋仲になれるっていうスポットがあるらしいですよ！」

ガタタツ！と桂馬は椅子から転げ落ちた。

「エルシイ、なんてことを言うんだ！ 天理たちはともかくそんな事言つと女神が……………」

キインと少女たちの方から、女神と入れ替わる時に頭の輪が出現する音がした。

ああ、やっぱりか。と桂馬は肩を落とす。

「エルシイさん、それは本当ですか！？」

「月夜、私は海二行キタイ……………」

「栞、私たちも行かなきゃ……………」

「歩美。行こう。」

「言っておくが、ボクは絶対に行かないからな！ 海に行くとゲームが濡れる！」

桂馬はそう言いながらカフェを去ろうとするが、その肩にポンと手が置かれ、恐る恐る振り返った。

「桂木さん、どこに行く気ですか？」

ディアナのニコリと笑った顔がそこにあつた。しかしその笑顔はどこか邪悪な雰囲気を出していて、桂馬の背中に冷や汗が流れる。

「は、放せよ！ボクはゲームするんだ！」

「逃がしはしない！」

メリクリウスが遠隔で発した術が桂馬の身体を絡め取り、桂馬はすぐに拘束されてしまった。

「ゲーム、ゲーム……！！！」

「ああ、うるさい。黙れ。」

メリクリウスがさらに拘束を堅くして口も封じ込めた。

「もがー、もがー！！！」

「こいつの隠しているゲームも置いていこう。でなければこいつはずっとゲームをして月夜と口を聞いてくれないだろうからな。」

「もがっ！？もがっ！！！」

ウルカヌスが女神パワーで桂馬が服のあちこちに隠していたPF Pを一つ残らず探し出した。

「でー！」

……場面は移って駐車場。

さすがに一つの車に10人は乗れないので、麻里の借りてきたレンタカーと天理の母の車の二台に別れることになった。

しかし、なぜこんな中途半端な組み合わせにしたのかさっぱり分からない。もう少しお金を出せば全員乗れる車も借りれただろうに……。

「口は解除しました。」

家を出る頃には力尽きたのか、ここまで無言だったのでメリクリウスは桂馬の口を開放した。

「いいかげん口だけじゃなくて全身開放しろよ！」

桂馬はメリクリウスの術で拘束され、さらにディアナに横で逃げないようにと監視されている。

「せめて車内に入るまではおとなしくしててください。」

「どうせ離れた途端に逃げるんでしょ？」

考えていることはお見通しである。

まあ、以前デゼニーシーに行った時の経験からなのだろうが……。

「せめてゲームを、ゲームをおおおおおお……。」
まさか全てのゲームを没収されてしまうとは思わなかった。
桂馬はハクアに拘束されたあと、8人の女子たちに全身をくまなく搜索され、全てのPFPを奪われてしまったのだ。
海にいったとしてもゲームがあればなんとかなるもの、ないのではもう砂浜で干からびて死ぬしかないではないか！
「それじゃあ、分乘してもらわね。じゃんけんでもして別れてね！」

もちろん桂馬と同じ車に乗るべく、女神達の闘心がめらめらと燃え上がっている。

風もないのに車のドアがしまり、それぞれのスカートの裾がバタバタとはためいたりしている。

「えっと、桂馬号は七人まで乗れるからね。あ、桂馬が乗るから6人か。」

麻理はそれだけ言うのと先に運転席に座った。
するとすぐにキーンと女神の輪が出てくる音がする。

「お前ら、ここでバトルする気か？たかが車のグループを決める程度で公共物を壊すなよ？もつと平和的に決めろ。」

「分かっています。しかし天理に任せると別の車に行ってしまうので。」

ディアナはじゃんけんする気まんまんのようだが、その後ろのウルカヌスは自らの周りに小石を浮遊させている。

しかし桂馬の視線に気づいたのか、小石が全て落下した。

「大丈夫だ。私が物を壊すようなことをいつした？」

「今戦闘する気まんまんだっただろ？」

「姉様怖い……。」

ミネルヴァが桂馬の脚にしがみつく。

「女神って意外と好戦的なものね……。」

「そんなわけがないだろう。ここは正々堂々ジャンケンで決めましよう。」

結局メリクリウスがしきってジャンケンをすることになった。ただし桂馬だけは固定である。

「それでは……。最初は……」

「「グー！」」

「じゃんけん……」

「「ぽん！」」

それぞれかなり力をいれて出した拳はバラバラでどうやら決まる様子はない。

「「ぽん！！！」」

……二回目。

しかしこの人数である。

8人でやってそう簡単に別れるわけは……

「「ぽん！！！」」

しかし、桂馬が懸念するほど長く勝負は続かなかった。

三回目は見事に別れたのだ。

結果はエルシィ、ハクアがパー。女神の6人がチヨキである。

「ボクは天理の車に乗ろうかなあ……」

「「桂木さん／桂木／婿殿？」」

ジロリと、女神の力でもこもっているのか、その視線だけで背中に冷や汗が流れる。

「分かった分かった！早く海に行って帰ろう。残念ながらそれが最善だ。」

「で！」

桂馬号の席順……

運転席に麻里。

助手席に天理。ディアナ

二列目左から歩美、栞、かのん。

三列目左から結、桂馬、ウルカヌス月夜。

「お前らは食いつきすぎだ！ボクの女装を見たってなんの得もないぞ！」

「桂木、その言い方では我々に得があれば女装するという風に聞こえるぞ。」

ウルカヌスの一言はただの指摘であつたはずだ。

しかしそれは他の姉妹達にとつては別の意味と捉えられるだろう。

「姉様ないすである！」

「というわけで私は得をする。女装してもらおうか。」

そっぴいながらメリクリウスは歩美のバッグを開き、女装のためのものを取り出そうとしていた。

「（一人だけ前の席だともまらないです。）」

ディアナはとうに引っ込んでいて、今は天理がプチプチを楽しんでいた。

「そろそろショッピングセンター着くわよ！」

「だそうぞ！ほら、あれだ！」

桂馬は外の巨大な建造物を指した。

しかしイナズマではないショッピングセンターなんて久しぶりである。

「で！」

（何せ急だったもので、海用の水着なんか買えてないんだよね。でもどんな水着がいいのかな？）

とりあえず水着のコーナーに来てみたものの、今まで学校の体育以外で水に入って遊ぶことは栞にはなかったもので、どんなものが好まれるのが全く分からなかった。

しかし、時たま図書館に入ってくるそう言う類の本ではたいてい、ビキニという下着とほぼ同じ範囲しか隠してくれないものしか出てこない。

（でも私にはこんな大胆な水着は無理ね。やっぱり競泳水着くらい

が限度だわ。でも桂木君ならこういう大胆なものの方がいいのかな？いやいや、私を着るのだから私の基準でいいのよ！)

でも、桂馬に自分のビキニを見せたら驚くだろうか？とか想像したり……

(だ、ダメよ！こんな格好で桂木くんの前になんか出ていけるわけがないわ！そもそも着るのも恥ずかしいのに、更衣室から出られるわけないじゃない！やっぱり私は普通の、肌の露出の少ない水着にするわ。これでいいの。私はこれでいいのよ。)

(栞、決まった？)

ミネルヴァはなるべく口を出さないように栞の奥の方に隠れていたのだが、栞が決断したのを感じて浮上してきた。

(私はこのくらいの水着でいいのよ。いいよね？)

それは学校指定の水着とほとんど変わらない形の競泳用水着だった。

色も紺と特に変わらない黒だ、それでは本当にスクール水着と同じだ。

(栞！そんなのダメ！せつかくのチャンスなんだからもっと勝負していかないと！)

(しょ、勝負！？ミネルヴァ、何言ってるの？私は別に勝たなくても……！)

(ダメー！私が許さない！)

(じゃあどんなのがいいのよ！ミネルヴァが選んでよ！)

(えつと……、じゃあこれ！)

ミネルヴァが栞の指を動かし、その先には先ほどやめておいたビキニというタイプの水着があった。

(無理無理！絶対に無理！私にはハードルが高すぎるわ！)

(じゃあじゃあ、これきてみてよ。)

ミネルヴァは栞の身体を操作して何枚かビキニを持って更衣室に入らせた。

「で！」

車内席順変更……

助手席、桂馬。

二列目左から栞、かのん、天理。

三列目左から結、歩美、月夜。

「ふう、さすがにあの位置は疲れた。」

先ほどは逃げ場がない位置だったので、今度は集合時間よりかなり早めに戻り、先に車の席を確保したのだ。

「それにしても桂馬があんなにもてるとは知らなかったわ。将来安心していいかなー？」

「不安だったのか？ボクは昔からテストの点は取ってたたる？」

お金の持ち合わせがなかったので、ゲームは買えなかったが、変わりに立体パズルを買って、ガチャコガチャコと順調に面を揃えていく。

「そうね。まあ、成績を自分から見せてくれたことは一度もなかったけど。」

「桂馬君ってすごいよね。テストの点数毎回1000点ばかりなんでしょ？」

「そ、そうなの！？」

かのんが親子の会話に割り込んで来て、天理もそれに便乗する。

しかし栞は一人で本を読んでいて、月夜は寝ている。

結と歩美は二人で話している。

そういえばこの面子ならちひろと京も呼べばよかったのにな。

「この前のテストの勉強見てくれた時に私も100点取れたんだよ！あの時は嬉しかったな！」

「そうか、よかったな。」

ガシャコガシャコと気味の良い音を立てて面が揃っていく。

パズルコーナーに置いてあった一番ピースの多いものを買ったけど、これじゃ海につく前に終わりそうだな。

とか考えながらテストの話はスルーする。

「桂馬、今度から天理ちゃんにお勉強教えてあげたら？」

「なんでそんなこと……。だいたい天理はそこまで成績悪くないだろ？」

実際のところどうかは知らないが、天理はどちらかというところと勉強ができるイメージがある。

なにせ、部活も入らずに駅前やイナズマで遊ぶでもなく、まっすぐ家に帰って手品の練習をしているくらいだからな。

「ま、まあ。教えてもらわなくても大丈夫だよ。」

「（天理、素直にお願いすればいいのに。）」

一瞬窓ガラスから声が聞こえたような気がしたが、まあいい。

「また今度のテストでも教えてくれたら嬉しいな！」

「そ、そうか。まあ、お互いそんな暇はないだろうけどな。」

ガシャンという音と共に全ての面が揃い、完成したキューブがフロントガラスの方へと投げ出された。

「なんだ、意外と簡単だったな。」

「え、それ簡単なの!？」

「やってみるか？」

言いながら桂馬はキューブを取って崩してからかのんに渡した。

「こ、こんなのできそうもないよ。普通のルービックキューブでも無理なのに。」

「そうか？おい、天理やってみろよ。」

「え、私!？」

かのんが桂馬から渡されて一、二度程動かしただけの立体パズルを右隣の天理に手渡した。

天理はそのパズルを手のひらの上でコロコロと回してから、カシヤリ、カシヤリと桂馬程ではないが確実に解きはじめていた。

「え？分かるの？」

「は、はい。こういうのならある程度……。」「

かのんはしばらく天理の手をじっと見ていたが、その動きの意味

はどうしても理解できなかった。

「ま、パッケージには難易度最高と書いてあるから、かのんが解けなくても無理はないだろ。」

まあ、そんなふうに言われてもこれは負けを認めざるを得ないよ
うだ。

桂馬はキューブを取られてとうとう暇になってしまった。後ろの
女子たちと話すのも面倒だし、寝よう。

その頃悪魔達は……

「もう海が見えてきたわね！」

「そうだね。」

二人と天理の母しかない車の中で暇にしていた。

まあ、二人は300歳以上。

こういう時の暇の潰し方はもう分かっていたのだが……。

「やっぱりこの面子じゃアテンション上がらないわね。」

やはりもう一回り大きな車で、全員でいけばよかっただろう。

「で！」

「海ついたわよ！」

麻里に言われて、桂馬は浅い眠りから覚めた。

すでに他の女子たちは着替えに行っているらしく、車の中には桂

馬だけが残っていた。

「あんたも着替えてきなさい。」

「言われなくてもそうするよ。」

車を降りた途端に太陽の光が桂馬をジリジリと痛めつけるかのよ
うに降り注ぐ。

ビーチサンダルで踏んだ砂は柔らかく、真っ白ではないが、海の
砂だと感じられる。

風が吹くと海特有の匂いがして、気持ちはそれなりによかった。
「早くいきなさい！」

人がせつかく海を感じてやっているのに……。
しょうがないな。と思いながら桂馬は荷物をもって更衣室に入った。

「で！」

当然ではあるが、ボクが更衣室から出てくる頃にはもう全員が揃っていた。

しかし水着の女子が8人もいるなんて羨ましい光景と思うかもしれないが、所詮リアルだ。

「桂木、やっとでてきたのね。遅いわよ！」

車の中でずっと暇だったハクアがちょっとすねたような声でそう言った。

「まったく、こっちはいやいや付き合わされてるっていうのに、遅いはいないだろ。」

「こっちは車の中でずっと退屈だったんですよ。早く遊びたいんです〜！」

「言っておくが、ボクはお前らと遊ぶ気なんていつさいないからな！お前らだけで遊んでろ！」

そう言って桂馬はパラソルとシートを持って先に砂浜に行こうとするが、その進路を水着姿の歩美が塞いだ。

「ちよつと、みんな待ってたのにそれはそっけないんじゃないの！？」

「あ、歩美！？」

歩美はスポブラの様なトップとスパッツタイプの水着で、陸上で鍛えたスラリとした肉体が太陽の光にさらされている。

ボクはその歩美を直視しないようにその脇を抜けようとする。

しかしそれが許されるはずはなく、「無視するな！」と言われて

ガシリと腕を掴まれてしまう。

「私だってこれでも結構頑張ってるんだよ？」

「ん……？」

なんだ？海でのイベントとしてはベタではあるが、もしかして褒めたりしてほしいのか？

しかし、こんな中途半端な露出度でどこをどう褒めればいいんだ？ ゲームではそういうことを言うやつは大抵ビキニなんだよ！

「なんだ？似合ってるでも言ってるのは大抵ビキニなんだよ！」

「な！？そ、そんなわけないでしょ！バカじゃないの！」

「わ、ちよつと待て！今服きてないからダメージがモロに……」

「うっさい、死ね！」

若干の赤面を隠すように放たれた蹴りが桂馬に炸裂し、その身体が一瞬間を舞ったが、すぐに頭から砂浜に叩きつけられる。

蹴りのダメージは大きい下が砂浜でよかった……。

「みんな行こつ！こんな奴ほつといてさっさと行こ！」

歩美はボクが持っていたパラソルたちを拾い上げ、他のメンバーと共にズンズンと先に行ってしまった。

「け、桂馬君、大丈夫？」

その中で天理がささつと近づいてきて、砂の上で悶えている桂馬に声をかけた。

「だ、大丈夫。……慣れてるし。」

天理は今はパーカーを着ていて、その水着の全容は分からない。

しかし、パーカーの裾から綺麗な脚が出ていて、桂馬の顔を一気に赤面させる。

ボクはリアルに惹かれたりしない！

「け、桂馬君？」

天理が急に立ち上がったボクを見て不思議そうにしているが、ボクはそれに構わずに砂浜へと向かう。

「天理、天理……！」

天理の持っていたビーチボールからディアナが顔を出した。

「天理、何をやっているんですか！このシチュエーションを無駄にしてはいけません！」

「だって桂馬君具合悪そうだし……」

「構いません！今攻撃せずにいつ攻撃するんですか！」

などという物騒な会話が後ろから丸聞こえなのだが、どうすればいいのだろうか？

とりあえず逃げた方がいいだろうか？

「桂馬さん、どこに行くのです？」

時すでに遅し。すでに桂馬の腕はディアナによってガツシリと捕らえられていた。

「ボ、ボクに触るなー！」

その手を振りほどこうと腕を振るが、それとは関係なくディアナの手は放されていた。

「せつかく水着を選んだのです。見てもらわないわけにはいきません！」

赤面するくらいならば言わなければいいのに、ディアナは言うだけにとどまらずに上着をその場で脱いだ。

「それでは……」

ふつと頭の輪が消え、ディアナが天理に強制的にバトンを渡した。

「きゃ、え、ディアナ！？」

天理は入れ替わったのに気付くと、自分の肌を隠すように手をバツつかせるが、全体を隠すにはどうしても足りないことに気付いて諦めた。

目一杯赤面した顔が「どうかな？」と聞いてくる。

天理の水着は……、これはディアナが選んだな。

いわゆるビキニというタイプの水着だった。それも一番シンプルなタイプで、それが天理とディアナの妥協点だったのかもしれない。しかし、その破壊力は素晴らしいものだった。

桂馬といえど、まず最初に目に入ったのは胸だ。それなりに大きなものがそこに収まっていて、間の溝、いわゆる胸の谷間というや

つが桂馬の目をひいた。

しかしその細い腕や脚もまた綺麗に輝いていて、それは神と呼べる領域なのかもしれない。

「えっと……、綺麗だと思うぞ。」

それは嘘ではなく。

「……ありがとう。」

天理もそれを悟ったのか、顔を赤くさせてそう言った。

「じゃあ早くみんなのところに行こっ！」

二人きりの状況に耐えられずにそう言った天理はビーチボールを拾ってさっさと海の方に走っていった。

桂馬もさすがにパラソルやシートなしではこのキラキラと輝く太陽の下では寝ることができないので、しぶしぶそれについていく。

「まったく、リアルというのは移動に時間がかかってしょうがないな……」

砂浜は他の客もちらほらといて、まあどちらかというと賑わっていた。

スペースがないほどではないが、それなりに砂浜は埋まっていた。

「天理さ〜ん、にーさま〜こっちですよ〜！」

エルシイの声に誘導されて無事にパラソルの元にたどり着いたボクはそのままシートの空いている部分に寝転がろうと飛び込んだ。

しかし、シートに飛び込む途中で何者かに腹を抑えられ、ボクの身体は一瞬宙に浮く。

「わ、なんだなんだ!?!」

そしてそこから砂浜に叩きつけられた。

「ぐえ」なんて声を出してしまったが、先ほどの歩美の蹴りほどの衝撃ではない。

誰かと思つてボクが顔をあげてみると、そこにはマルスがいた。

「婿殿、寝てはいけない。まだ結の水着を見てもらっていないからな。」

「お前はそんなことのためにボクを砂浜に叩きつけたのかよ!ボク

は寝たいんだよー。」

「何がなんでも起きてもらおう！」

しかしマルスは引き下がらず、桂馬を引き起こすとそのまま海の方に投げ飛ばした。

軽々と投げ出された桂馬は綺麗な放物線を描いて海はかなり遠くの方に飛んでいった。

「うわああああ……！！この高さから海に叩きつけられたらバラバラになるぞ！」

しかしマルス自身もその翼で桂馬の着水地点に先回りして、着水寸前のところで受け止めた。

「さあ、海の上では寝れないぞ。結の水着を見てもらおう。」

「お、降ろせ！降ろせ！」

空中で受け止められた桂馬は偶然か必然か、マルスにお姫様抱っこをされていた。

しかしマルスはボクが降ろせというとパッとボクのことを離してしまう。

「わ！？落ちる！」

結局2〜3mの上空から落とされた桂馬は海上に大きな水柱を建ててしまった。

そのあとからマルスが……いや、どうやら結に戻って海に入ってきた。

「マルスはボクを殺す気か！」

「まさか、私は結の手助けをしたまでだ。」

マルスが海面から答える。

「ボクもマルスがここまでするとは思わなかったよ。ていうか浜まで結構遠くない？」

「これで流されたりなんかしたらお前の責任だぞ！」

まあ、一応ブイが浜とは逆側に浮いているので安全圏ではありそうだが。

しかしここから泳いで戻るとどれだけ時間がかかるだろうか……？

「まったく、ボクは寝たかった！」

そういいながら浜に向かって平泳ぎで戻りだした。

「桂馬君、ゴメンね。それにこんなところじゃ水着を見せようにも難しいよ。」

「面目ない。」

まったく、マルスにも少しは考えて行動してもらいたい……！

「じゃあ、浜まで競走しようよ！」

桂馬はまったくそれに乗る気は無かったが、しかし結局浜までは戻らないといけないのだ。

「ただの競走じゃつまらないから、勝った方はなんでも好きな事を命令できるってことでいいよね！」

「……なるほど。ボクにゲームを挑もうと言うのか。いいだろう。ボクがゲームで負けることはない！」

リアルでの勝負とは言え、ゲームならば負けるわけにはいかない。それに、一応女の子もいるわけだしな。

「それじゃあ今からスタートしよう！よいドン……！」

「な！？せめて同じ位置から泳げ！」
しかし結はそれをまったく無視してずっと先に行ってしまう。

結の泳ぎ方は綺麗だった。
まるで人魚のようにしなやかに脚を動かし、腕が綺麗に回っている。

そして結の女らしさを強調するような露出度の高い水着が結をさらに美しく見せていた。

……おっと、見惚れている場合ではない。

結のやつは勝ったりなんかすると何を命令してくるか分からないぞ！

「ゆ、結待てー！」

しかし桂馬の泳ぎはそれほど早くなく、結との間は一向に縮まらない。
ない。

というか、クロールと平泳ぎの時点で縮まるわけがない。

「桂馬君早く早く！」

結は余裕で立ち止まって桂馬にそういう。

しかし、それは苛立ちや焦りとなり桂馬を覚醒させた。

「こうなったら神モードを使ってやる！」

そういうと、一瞬のうちに桂馬の動きが変わる。

学校などで習うどんな泳法とも違うおかしな泳法であったが、桂馬は確実に結との差を縮めていく。

「え、え！？」

余裕だと思っていた結に桂馬がだんだん迫ってきて、結もまた焦りだす。

すでに半分ほど泳いだが、まだまだ学校のプールの10倍以上の距離が残っている。

まだまだ逆転の余地はどちらにもあった。

結は綺麗に泳ぐ事よりも早く泳ぐことを優先しようと、その手足を先ほどより早く動かした。

しかしそれは実は意味がないのだ。

それではただ焦っているだけで、速度は早くならない。

しかし結は必死で手足を動かし、桂馬に追いつかれまいとする。

「追いついたぞ！」

「桂馬君！？わっ！」

結の横を桂馬がすごいスピードで追い抜き、結はそのせいで少し海水を飲んでしまう。

「ふふふ、このボクに勝負を挑んだことが間違いだったな！」

「ま、待って！桂馬君！」

結が必死で泳いでもまったく前に進まない。それに結構な距離を泳いで、体力もかなり消耗していた。

そんな結の泳ぎはもはやむちゃくちゃだ。

「待って！」

結の焦りが絶頂に達したその時だった。

「いたっ！？」

結の脚に急に激痛が走り、反射的にそこを抑えようとして海水を飲んでしまい、大きくむせてしまう。

(脚が……つった!?)

結はその場で泳げず、頑張って浮こうとしたが、脚がつっているせいでどうもうまくいかない。

「け、桂馬く……、あ、足が……助けて!!桂馬君!!け……」

しかしそうして大声を出そうとして、また海水を飲んでしまった。今度は浮き上がることができず、ブクブクと海の中に沈んでいく。マルスも身体の不調では力を発揮できない。

結は沈んでからも治そうと頑張るが、長く泳いでいたためか、なかなか治らない。

そうしているうちに息が足りなくなってきた、がむしゃらに動かしていた腕も力が抜けてくる。

「(桂馬君。桂馬君!桂馬君!!)」

桂馬なら助けてくれる。そう思って結は祈るように手を胸の前で合わせた。

その瞬間、結の身体を桂馬の腕が掴んだ。

後ろから抱きつくようにして掴まえ、そのまま海上に引き上げる。

「ぶはっ!お前死ぬ気か!必死になりすぎなんだよ!」

「あ、ありがとう桂馬君。」

しかし結の声には力がまったく感じられなかった。

それに脚の方もまだつっているようで、今は全体重を桂馬に預けていた。

「それじゃあ浜までいくから背中に掴まれ。」

結もそうする他ない。

結の腕が桂馬を包み、肌と肌が触れ合う。海水は相変わらず冷たかったが、密着する二人にはさらに冷たく感じられた。

「まったく。駆け魂狩りで駆けずり回ったせいでかなり体力が落ちちゃったよ。」

しかし今は感謝すべきか。あのまま浜まで行って助けを呼ぼうか

とも思っただが、それでは間違いない遅かった。

エルシィやハクア、他の女神にも声が届くような位置ではないしな。

「ありがとう、桂馬君。」

息切れを起こした結の声が妙に艶めかしくて、桂馬は聞こえてないふりをして顔を海に沈めた。

浜に帰って結をパラソルの下に寝させたあと、ボクは海の家に飲み物を買って行った。

「まったく、ボクはゲームさえできればいいのに。なんでゲームを取り上げるんだよー！」

「桂木がゲームしかなくなるからでしょー！」

いつの間にかハクアがボクの後ろに立っていて、その片手にはサイダーが何本か握られている。どうやら罰ゲームか何かのようだ。こいつがエルシィと組んでいたことは目に見えてわかる。こいつが運動系のゲームで負けるはずがない。

「いいだろ、別に。ボクがゲームをしてもお前らは遊べばいい。」

「……あんたホントに人の気持ち感じなさいよ。」

呆れたような声を出しながら腰に巻いてある羽衣から現金を取り出してレジに出す。

「まったく、マルスにはひどい目に合わされたし、もう疲れたよ。」

「そういいながら豆乳のビンの蓋を開けていつきに飲み込んだ。」

「あ、そうだ。どう、私の水着姿は？」

ボクはあまりの文脈無視に言葉を失い、空になった豆乳のビンを傾けたまま一瞬静止してしまった。

「……なぜこのタイミングなんだ!？」

そう言われてハクアの格好を見ている。

ハクアの水着は明るい色をしたビキニタイプの水着で、腰のところには鮮やかな色の羽衣が巻かれています、センサーで止めてある。

下の方から見ていけば十分可愛いように思うが、胸の位置で少し残念な気持ちになるのはハクアだからしょうがないだろう。

しかしそれを置いておけばハクアのセンスはもともと悪くない。

「いいんじゃないか？まあ、ボクは嫌いじゃない。」

ゲームの中で水着といえばスク水かビキニということはよくあることだ。

「文句をいうほどじゃない。」

「あ、ありがとう。桂木も似合ってるわよ！」
似合っている…？

ボクの今の格好といえば、裾の緩い海パンにノースリーブの上着を羽織っただけなのだが、どこがどう似合っているというのか？お世辞なのは見え見えだ。

「あ、そうだ！桂木も私達とビーチバレーやらない？」

「やらない。」
即答である。

そんなことする訳がない。人が寝たいと言っているのに何をぬかすか。

「でも意外と楽しいわよ？」

「楽しい楽しくないの問題じゃない。ボクは寝たいんだ！」

これ以上話していると強制連行もありそうなので、すぐにその場を立ち去ろうとする。

「いかせるわけないでしょ？」

ニコニコと効果音がつきそうな満面の笑みが今は怖い。

そしてその手が桂馬のことを逃がすまいと退路を大きく塞いでいる。抜けることは無理そうだ。

「はあ……。しょうがないな。じゃ、見るだけだぞ。」

「な！？」

ボクはそう言ってハクアの持つピンを半分持ってやろうと手を差し出す。

しかし、それに対する反応は予想外のものだった。ハクアはピン

を羽衣で持ち、自分の手でボクの手を取ったのだ。

「お、おまつ!! どういうつもりだ!! 離せ! 離せ!!」

いきなりの握手イベント。こちらが仕掛けたのにわけの分からな
い返しかたをされて、桂馬の頭は一瞬で動揺してしまった。

つい先ほどまでビンを持っていたハクアの手はそれはそれは冷た
いものだったが、どちらの体温のせいか、そんなものはすぐに分か
らなくなってしまう。

掴まれた手を大きく振って離そうとするが、それはまったく意味
をなさず、ハクアが桂馬の手を離す様子は無い。

むしろ離すまいとより強く握られているような気すらする。

「……このくらいの役得があってもいいじゃない。」

ボソボソと何かわけの分からないことを言われても譲る気は無い。
離してもらおう!

「この状態で女神たちのところにいくと修羅場になるに決まってる
だろ! だから離せ!」

そう言いながら力任せに手を戻そうとするが、ハクアの力もなか
なかのものである。

いや、むしろだんだん強くなってボクの手は離れそうにもない。

もしこんな状況で女神持ちにでも会ったら好感度はがっくりと下
がるぞ……!!

「桂馬?」

「おわああああ!!」

第三者の介入により二人の手は光の速さより速いのではないかと
いうような速度で引き戻される。

「何をしていたのです?」

「い、いや……飲み物を買いにきてたんだよ!」

介入者は同じく飲み物を買ってきた九条月夜だった。月夜は疑問
に思いつつも、とりあえず紅茶を注文する。

「そうだ桂馬、私と向こうの方に行くのですね。とても美しい景色
の見られるところを見つけたのですね!」

いい景色と言ってもどうせ海だろう？ 興味ない。

断ろうと口を開けたが、先にハクアの言葉が割り込んだ。

「ちよつと、私が先約なんだから後にしてよね！」

おいおい、こんなところでケンカとかするなよ。ウルカヌスが出てきたりでもしたら大事になるぞ。

しかし、桂馬が懸念していたようなことはどうやら起きなさそうだ。

よく考えたらウルカヌスは立つことができないのでこういう場に出てくることはできないし、月夜はケンカという行為が嫌いだ。

「そうなのですか？ では桂馬、後ほど向こうの岩場に来てください。」

前に出ているのが月夜でよかった。

「分かった。考えておくよ。」

「さ、行くわよ桂木！」

ハクアが桂馬の事を後ろから押しして、強引にその場から離れさせられる。

しかしまあ、それでもいいかと桂馬はハクア達がビーチバレーをやっている場所まで移動した。

ビーチバレーのコートはどうやらこの浜の備え付けの物の様で、意外とがっしりと立てられていた。

ネットはそれほど高くない位置に設定されていて、こいつらがどれほどゆるいプレイをしていたのかが丸分かりだ。

ちなみに今コート内では歩美&エルシィVSディアナ&アポロの戦いが繰り広げられている。ちよつとディアナがサーブを打ったところだ。

女神ではあるがその力は極限まで抑えられているようで、球速は常人のそれとほとんど変わらない。

しかしさすがはディアナ、歩美とエルシィの取りにくい位置に正確にボールを打ち込んだ。

「エリー！」

しかし歩美が自慢の脚力を使ってその場所にダイブをし、地面につくギリギリの位置で上手く受けた。

「ナイスです歩美さん！」

アンダーハンドで取ったボールが高く宙を舞い、エルシイの位置に的確につなげられる。

エルシイもこれくらいボールはさすがに取れるだろう。

「はい！歩美さん！」

予想に反せず、エルシイはなかなかいいボールをネットの際どいところに乗せた。

「エリーナイス！……ええい！！！」

大勢を立て直した歩美がその脚力をもって高く飛び上がり、空中のボールを叩き落とす。

しかしそのボールはアポロのブロックによって弾き返され、しかしエルシイは反応できずに一点を取られてしまった。

「なかなか良さげな試合をしているな……。」

点差は現在2点でやはり女神チームが勝っているが、女神相手にこれほどの二点差でいられるというのもなかなかすごいだろう。

歩美はもともと鍛えているからか運動神経では女神たちにも劣っていない。（さすがに力では負けるだろうが……）

エルシイも一応悪魔だ。運動能力がないわけではない。まあ、あいつはバカだからそれをまったく上手く使えていないが……。

なんてことを考えていると、ふとエルシイがこちらを向いた。

「あ、にーさまだー！」

どうやら今さら気づいたらしい。

ボクはとりあえず手をふる程度のあいさつをしてパラソルの影に座る。

「にーさまー、一緒にビーチバレーやりましょうー！ハクアも戻ってきたし、3人対3人でできますよ！」

「いやだ、ベンベン！」

エルシイはその反応を予想していただろうが、やはり少し身体を丸めて落ち込んでいるようだ。

ま、エルシイは攻略対象じゃないし、別にいいか。

「桂木さんもやってみてはいかがですか？意外と楽しいですよ！」

「嫌だつて言ってるだろ！なんでボクがバレーなんかやらないといけないんだよ！」

ボクはそういいながらその場にバタリと寝転がる。

なんでボクが運動なんてしなくちゃいけないんだ。ボクはただのゲーマーだ！それに運動を強いるなんてどうかしている！

「では桂木、私が一つお告げをしてやろう。」

そう言いながら派手な赤いビキニを着たかのん、もとい女神のアポロが近寄ってきた。

そしてボクの顔を覗きこみながら何度か砂を握ったり落としたりしてからこう告げた。

「おお、このゲームに参加しなければひどい目に合いそうじゃぞ？」
「なっ、なに!？」

適当に聞き流そうかと思っていたが、そう言われてなお拒否するようならば確かにディアナやハクアにボコられるに決まっている。

しかしボクは運動なんてしたくない！

したくないのに……

「……仕方ないな。一回だけだぞ！」

ボクはしぶしぶコートの中に入り、ネットを見上げた。

実際のコートの中から見てもやはりネットは低い。ボクが手を挙げただけでブロックになってしまうような位置だ。

「あ、人数が増えたのでこのゲームは終わりにしませんか？」

「じゃあチームを組みなおさなきゃね！」

歩美がそう言いだし、砂浜にあみだくじを書いてチーム分けをした結果こうなった。

天理、ハクア、桂馬VSかのん、エルシイ、メルクリウス歩美

先行はこちらだ。

「そ、それじゃあ行きます！」

そう言いながら天理の放り投げたボールが宙を舞い、天理の手がそれをフワリと叩き、モーションからは想像できなかったとても緩やかな動きをさせた。

「かのんちゃん！」

そうしてその緩いボールはあっさりとエルシィに取られ、かのんにつながられ、かのんはそのボールを自然な動きで高く打ち上げ、次に回す。

かのんの引き締まったお腹が目の前を通り過ぎていくが、落とし神には関係のないことだ。

「メルクリウスさん！」

「任せろ！！！」

そう言いながらバシリと叩き落とされた球は異様な加速をして砂に叩きつけられた。

「おい、今の球は絶対魔術を使っただろ！」

「ああ、その方が面白いだろう？ さあ、自称「神」の実力を存分に見せてもらおう！」

メルクリウスがボールを放り上げ、叩き割る気かと疑うほどに強くボールを打った。

「った！しまった、ボールが……！！！」

ハクアがそれを受けるも、強すぎるボールはハクアのコントロールを狂わせ、コートの外に落としてしまう。

「やっぱり反則よ！人間と同等の力で戦いなさい！」

「桂木、貴様が受けてみる。ゲーム世界の神とやらに挑戦してやる。」

「ちょっと、無視しないでよ……！！！」

なんてハクアの発言はさほど問題でもない。

それより……

「……神に挑戦だと？」

く、どうする。

ボクは確かに神だ。だが、あの魔球に打ち勝つルートがさっぱり見当たらない。

勝機が見えないなら作るとは言うものの、これは実戦だ。圧倒的にあちらの方が力を持っている。

しかし神としてのプライド的には挑戦を受け取らないわけにはいかない。

どうすれば……

「どうした、受けるのか受けないのか？」

メルクリウスがニヤリと笑う。

「よし、分かった。そのかわり、ボクが無事に受けきれた時はなんでも言うことを聞いてもらうぞ！」

ありつただけの不純な気持ち視線に込めてそう言うっておけば少しは動揺するはずだ。しかしメルクリウスはその視線を認識してなおニヤリと笑いながらこう言った。

「いいだろう。桂木が勝った時はなんでも言うことを聞いてやる。その代わり貴様が負けた時は……フッフ。」

まったくこたえていない……。負けた時の事を考えておいた方がいいだろうか……。

ともあれ、とりあえず試合再開。

ボクは意識的に神モードを発動させるが、しかし気分は乗り気でないため本来の30%の力しか出せない。

……気がする。

「覚悟はできたか？いくぞ！」

答えは聞かずにメルクリウスがモーションに入った。こうなったらもう全力で受けるしかあるまい。

メルクリウスが身体からオーラを発し、その身体をグツとかがませる。そして力強く飛び上がる。

もともと引き締まった歩美の身体が大きくそらされ、腕は天高く振り上げられた。

神がかった動体視力により、メルクリウスの動きはもはやスロー

モーションに見える。

そしてボクの神がかった反応速度ならばボールを捉えるところまでは簡単だろう。

しかし、問題はそれをしっかりと受け取れるかどうかだ。捉えたところでしつかりと繋げなければゲームに勝つたとは言えない。

そんなことを考えているうちにメルクリウスの手がボールを打ち、ボールが変形したまま猛スピードで近づいてくる。

「うああああああああ……！！！」

ボールという名の弾丸の射線上に腕を差し出す。

残っている力のほとんどを使って繰り出されたそれは、予想通りボールを捉えた。

しかしそれが腕に触れた瞬間、嫌な予感がした。

回転していたのだ。ボールはなぜか縦に回転していて、それはつまりボクの腕に当たった瞬間、射線が変わるということだ。……顔面の方向に。

「グヘッ!？」

その強烈なショックにより、ボクの意識はブラックアウトした。

「う、うーん……」

「き、気がつきましたか……?」

ボクが目を覚ますと、目の前には栞が……というか本の表紙が見えていた。

「……あ、ああ。見てくれてたのか?」

「ええ、まあ、アポロさんが治療をしたあとは……」

「そうか……って、わあ!」

ボクは頭の下の子の柔らかいものに気づき、慌てて飛び起きる。

「な、なんで膝枕なんかしてるんだよ!」

「えっ!? えつと……」

理由はだいたい分かるぞ! 女神だ。中にいるミネルヴァが強要したに違いない。むしろそうでないとおかしい!

栞はこんな事をする奴ではなかったはずだ！

「……まあいい。ボクはこのまま寝させてもらう。」

ボクはそう言っただけ、栞の膝……ではなく、横においてあるカバンを枕にして寝転がる。栞には一応背を向けておく。

「ご、ごゆっくり……」

視界の端に見える栞は本で顔を隠してそう言った。

しかし、そのセリフとは裏腹にキーンという音がして女神、ミネルヴァが現れた。

「し、栞、水着見てもらわないと……」

「で、でも桂木くん眠たいみたいだし……」

本人達は聞こえていないつもりかもしれないが、すべて丸聞こえだ。会議なら身体の中でやればいいのに、変にフラグを立てるなよ……。

ここはどうするべきか……。何も聞いていなかったことを装って見せてくれとでもいうか？それとも全部聞こえるぞと言ってしまっか……。

「せ、せっかくすごい水着選んだんだから、見せないと損だよ……？」

「す、すごい水着って……結局選んだのあなたでしょう？私は水着なんてどうでも良かったのに……」

相変わらず本で二人の顔は見えないが、話し声はまったく遮断できていない。

……このままでは安心して眠れない。面倒なイベントは先に片付けておこう。

「こんな水着姿見せるなんて……」

栞が本の端からこちらをチラリと見る。その瞬間を見計らって寝返りをして、栞と目を合わせる。

「そういえば栞はどんな水着を来ているんだ？」

今話していたことを質問され、反射的に一步下がろうとしたがそれはかなわず、代わりに顔を隠していた本を放り投げてしまった。

本という盾を失った栞の顔は一気に朱くなってしまふ。

「わ、私の水着なんて需要ないです……」

需要があるかないかは見てみないと分からないのだが、ここはあえて見る必要もないのかもしれない。

まあ、それほど重要なイベントでもないし引き下がっても攻略に支障はないな。

「……見せたくないならいいんだ。」

そう言つて再びごろりと寝転がる。

「ほ、ほら桂木くんも見せなくてもいいって言つてることだし、もういいでしょ！」

「栞、ダメ！ せっかく二人きりなんだから見せなくちゃ！」

再び全然ひっそりとしていないひそひそ話が始まる。せめて聞かえなければいいのだが、全て聞こえているのだから対処に困る。

無表情を保つのだつて結構難しいんだぞ！

「……やっぱりダメ！ 恥ずかしいもの！」

「栞、勇気を出して、一回だけでもいいから頑張つて。」

視界の端にいる栞がちらりとこちらを向いた。顔は相変わらず真っ赤だが、まさか見せる気にもなつたのか！？

「か、かかか、桂木くん！ わ、私の水着姿をみ、見てください！」

栞がいきなり立ち上がつてボクの目の前にまわってくる。顔は真っ赤で脚は緊張のせいとか若干震えている気がする。

ものすごく恥ずかしいはずなのに、栞はそれでもボクの前に立つて上着のボタンに手をかけている。

く、女神め。本当は悪魔なんじゃないかと思うようなイベントばかりしかけやがって。

しかしその手には乗らない！ 一度はこちらから仕掛けてやったのにそれをふいにしたのだから、ボクはもう寝る！

そう固く決意してまぶたを閉じようとする。

「ね、寝ちゃダメ！」

その言葉とともにいきなりすごい圧力が身体にかかり、ボクの意

識は叩き起こされた。

この圧力は前にも経験したことがあるぞ！ミネルヴァの結果だ。

「わ、分かった。ちゃんと見るから落ちつけ・・・っ!？」

ボクが身体を起こしてミネルヴァの方を見ると、ミネルヴァの股の辺りからなんだかわけのわからない三角形の布がハラリと落ちていくのが見えてしまった。

それはどうやら二つの穴が開いていて、そこにミネルヴァの脚が通っている。

「お、おいバカ！お前の身体は朧より小さいんだぞ！せめて場所を考えろ！」

それがなんなのか理解するのに、たつぷり3秒はかかっただろう。そう、その三角形のものの正体は下の方の水着だ。

それが落ちていると言う事はいま朧は下半身丸裸なのだ。

さすがにこれは見てはまずい、そう思ってボクは理解した瞬間に手で顔を隠し、注意を促した。

しかし上着が長かったことが幸いして、ミネルヴァの下半身は守られていた。

「?・・・はうつ!?!や、やだー！」

しかし次の瞬間、フツと頭の輪と背中の中が消えかかった。今朧に戻るつもりか!?!そんなことをしたら上着の丈が足りなくてボクどころかこの大衆に朧の下半身を晒すことになるぞ!

その動作が見えた瞬間、ボクは結界が消えるまでの一瞬の隙に朧を押し倒し、周りの眼から守るためにその上に被さった。

「・・・あうっ!?!?か、かか・・・んぐっ！」

朧が大声を出すのを防ぐためにボクは彼女の口を手で押さえた。

「朧、今大声を出しちゃだめだ。そんなことをしたら周りに気付かれて大変なことになるぞ。」

そう言いながらボクは周りの反応を確認する。・・・どうやら気づかれてはいないようだ。

しかしとっさのことだったので手足の位置を調整する暇もなく、

ボクの脚が栞の内股に挟まれてしまっている。しかもはずみでボクンが取れてしまい、明るい黄色をした水着が包む胸があらわになってしまう。

栞の肌の温度が脚に直に伝わってきたり、口を押さえている左手に鼻息がかかったりして、なんだか変な気分だ。

栞はボクの説明を聞いて、コクコクと静かに素早く頷く。顔はさらに赤くなり、眼には涙が溜まる。栞の脚がガクガクと震えているのが直に伝わってくる。

「み、水着はちゃんと脚に引っ掛かっているよな？」

再びコクコクと素早く何度もうなづく。

「じゃあ1、2、3の合図でボクが栞にタオルをかけるから上手く直せよ。1……」

ボクは栞の口から手を退けて目の前にあった大きそうなタオルを掴む。

「2……3！」

その合図とともにその場所から離れ、栞にタオルを被せてやる。おそらく位置はあっているはずだ。当然見てはいない。

「は、早く直せよ……」

そのまま栞の隣に座って水平線の方を見ておく。

しばらくすると栞の方からボクの上着を引っ張ってきて、直せた事を教えてくる。

「大丈夫か……？」

「う、うう……。こ、怖かった……」

栞がボクの上着を引き寄せて腕を抱いてきて、少し驚いたがまあ、しばらく貸してやってもいいかもしれない。どうやら泣いているようだ。

「ミネルヴァ、お前のせいだぞ。」

鏡の中のミネルヴァは絵に描いたようにしょぼんと落ち込んでいて、これ以上怒る気にはなれなかった。

二人ともなかなか落ちつかず、ボクはこの日結局寝ることができ

なかった。(気絶は除く)

「じゃあ、そろそろ帰りますか！」

集合時間になって、もうほぼ全員がパラソルの元へと帰ってきた。日はもうかなり傾いていて、パラソルはほとんど意味をなしていない。

ここにはすでにボクとエルシィ、ハクア、天理、かのん、結、栞、歩美とあと大人二人が集まっていた。

「月夜ちゃんは？」

そう、月夜がまだきていない。それはもうみんなすでに分かっていることだ。彼女はこんな海でも天体観測をして帰るつもりなのか？冗談はさておき、集合時間を10分以上過ぎても月夜が戻らなかった。浜辺で月夜の捜索活動が始まった。

結構広い浜辺でとりあえず選択肢総当たりで探してみているものの、月夜はなかなか見つからなかった。

「まったく、月夜はどこに行ったんだ。」

「海の中にはいなかった。」

マルスが翼を使って空から海上を確認したが、どうやら結の様に溺れてしまったなどという事はなさそうらしい。

「海の家もない！」

「そうか、じゃああと探してないのは……砂浜。」

「私向こうの方に行ってください〜！」

「じゃあ私は向こうに行くわ！」

それぞれがいろんな方向へと散らばっていく。

しかし砂浜は広い。10人近くで散らばってもこの砂浜で月夜を探するのは難しいだろう。

そう言えば海に来てからほとんど月夜と話していないな。月夜は人との交流がないからボクが唯一話せる人間だったのかもしれない。

……。
いったいどこへいったのか……。

「そう言えば岩場に美しい景色があるって言ってたな……。」
岩場の方に行ったやつはいないようだな。一応探してみるか。

「月夜！いるか？」

日はすでに水平線の向こう側に消えかけていて、月は空に上がってきている。本当に天体観測でもして行くのかと思うような時間になってきてしまった。

昼間に指さされた岩場は夕日の色に染められ、ところどころ陰になっけていて危ない。こんなところを歩いて怪我でもされたら面倒だ。早く月夜を見つけよう。

「桂馬？桂馬なの？」

月夜のことを呼ぶと、意外とすんなり崖の向こう側からよきつと手が現れてこっちに来いと指示を出した。

崖の向こう側ではあったが、あの余裕からして落ちたわけではなさそうだ。

「お前そんなところでなにしてるんだよ？」

淵に寝転がって崖の下を覗くと、誰かが掘ったのかただの風化によるものなのか分からないが、少しくぼんでいて、人が入れそうだった。

月夜はその奥の方に腰掛けていた。

「どうしたのですか？早く入るのですね！」

「仕方ないな。みんな待つてるから少しだけだぞ！」

まあ、こんなところで待たせてしまったのはボクの責任でもあるわけだしな。

ボクは崖の淵に手をかけ、くぼみの中に飛び降りる。

「ちょうど太陽が水平線に隠れそうなので、すぐ終わるのですね！」
ボクは月夜の横に腰かけて水平線の方を見る。

太陽の光が水平線に沿って広がっていて、上の方はすでに夜の闇が迫ってきている。こういう光景は何度も見たことがある ゲームで がやはり何度見ても綺麗なものは綺麗なな。

そんなことを考えているなかで、ふと月夜の視線に気づく。

「なんだ？」

そついいながら視線を返してやると、月夜は即座に顔を背ける。

「な、なんでもないのですね！」

また水着絡みか……？

一応月夜の水着を分析してみると、どうやら彼女の水着はワンピース型の水着で、胸の周りやスカートの一部にレースが使われていて、月夜好みのロリータファッションっぽくなっている。

駆け魂攻略の時にも思ったが、やはり月夜にはロリータファッションが似合うようだ。

ロリータファッションは基本的に胸の大きい女子には似合わない。そして月夜は胸も小さく体型もスラリとしているので、ワンピース型の水着でかなり映えている。

「あ、あまり見ないで欲しいのですね……。」

「あ、悪い。」

月夜が大きなタオルで自分の身体を隠すので、ボクも分析をやめて水平線に視線を戻す。

太陽はすっかり落ちていて、水平線の光はもう消えていた。

「そろそろ帰るぞ。」

「そうですね。私も帰りたいたいのですね！」

月夜はそついいながら立ち上がり、お尻についた砂を適当に払う。

「それじゃあ月夜が先に上がりなよ。」

「嫌なのですね！」

「登れるのか？」

「登れるのですね！」

月夜はそつ言って自力で上がろうとするが、どうやら淵に手が届かないようだ。見ていて危なっかしい。

「ほら、一人じゃ届かないだろ？押し上げてやるからさ。」

「わ、分かったのですね。」

月夜はしぶしぶボクの方に近づいてきて「抱っこ」と少し顔を赤

らめながら腕を前に出して身体を差し出した。

ボクも「はいはい」なんて言いながら月夜のお腹あたりを掴む。

「ひゃっ！」

「へ、変な声出すなよな……。」

「ふ、服が薄くて感覚が伝わりやすいのですね……！」

しかしみんな待つているはずなので気にしないようにして、そのまま持ち上げていったん肩のところにおく。

「け、桂馬、どうしたの？」

「軽いとは言え、普通サイズだとさすがにキツいな。……行くぞ！」

今度は月夜の腰の辺りを掴み、「よっ！」と気合いを一発いれて崖の淵に向けて一気に押し上げる。

崖の淵はそこまでしても月夜の胸の辺りまでしか届かない。

「け、桂馬、もうちょっと……！」

そんなこと言われても、これ以上押し上げるためには腰より下、具体的には腿やお尻を掴まないといけないのだが……。

そういうルートを通るといろいろと大変なフラグが立ってしまうのだが……。

いや、ここは仕方がないと割り切るべきだ。

「分かった、いくぞ！」

腰から手を離し、それよりなるべく下の部位を掴もうとする。しかし掴んだ瞬間とても柔らかい感触をボクの手が感じてしまう。

「き、きやああああああああああ……！……！……！」

それを敏感に感じ取った月夜がボクの頭の上でジタバタと暴れる。それでも離すと危ないので余計に力が入り、それに応じて月夜もどンドン落ち着きがなくなっていくてしまい、負の連鎖が起こってしまう。

「っ、月夜落ち着け……ぐわっ！」

暴れる月夜の足がボクの顔面にクリーンヒットし、その反動で月夜は崖の上上がったようだ。

それを見ながらボクは反対に崖から転落していった。

……今日はよく気絶する日だな。

そんな事を思いながら目を覚ましたのは帰りの車の中だった。

どうやら行きに乗ってきた車ではなく、天理の母が運転する小さいほうの車に乗っているようだ。

「やっと目を覚ましましたか……。」

頭の上の方からディアナの声が聞こえ、なんだと思って意識が急速に覚醒される。そしてボクは今の状況を完全に把握した。

それとともにボクはディアナの肩から頭を離す。

「ボクに……。」

触るな。と言いかけて、状況を思い出す。まず間違いなくディアナ（もしかしたら天理だったかも）に寄りかかったのはボクだ。

その状況でそんなことを言おうものなら八つ裂きにされてしまう。

「なんでもない。」

「それだけですか？誰があなたを助けたと思っっているんですか……。」

「

そうか、ディアナがボクを助けてくれたのか。

「ありがとう。」

「まったく、あなたは何をやっているんですか……。あなたが死んだら悲しむ人がいっぱいいるでしょう。」

外を向いている為ディアナの表情は確認できなかったが、少し声が震えている。もしかして泣いているのかもしれない。

悲しむ人……。つい最近までは家族くらいしかいなかったはずなのに、今はずいぶん増えたかもしれないな。

それがいいことなのか悪いことなのか、今はまだ分からないが……。

とりあえず、ディアナはボクが崖から転落しているのを見て、すぐく落ち込んだらしい。

「ごめん。今度から気をつけるよ。」

「まったく……。」

振り向いて、ディアナの目を見てそう言うと、今度はディアナが窓の外の方を向いてしまう。

涙は流れていなかった。これ以上のフォローは必要ないな。

そう思ってボクもまた外を向く。

「……………」

「……………」

車内はエンジン音以外の音がまったくしないほどに沈黙する。

音を出してはいけないような緊張感すら感じる重い沈黙をどちらかが破るのか、それともこのまま最後まで何も話さないのか……………」

しかしここは話した方がいいのだろうか？ゲーム的にはこの状況で話しかけるのは男の方が多いが、話しかける必要性は全く見当たらない。

「か……………」

なんて思っていると、ディアナが口を開いた。

「桂木さんは今日は楽しかったですか？」

「……………」それを聞くのか？楽しかったなんて……………」

思うはずがない。寝たかったのに引つ張り回され、投げられ、蹴られ、気絶させられ……………」

そんなことが面白いと思うほどボクはMじゃない。

「……………」率直に言うと疲れた。って感じになるが？」

「そうですね……………」

遊んで疲れたのならまだ楽しかった部分もあるだろうが、ボクは一度も自分から遊ぼうなどと思っていなかったのだ。

「お前は楽しかったのか？」

「そうですね……………」。楽しかったと言うか……………」

さきほどのセリフで「桂木さんは」とあったのでディアナは楽しかったのかと思っただが、そういうわけではないのか？

と一瞬思っただが、何を思い出したのかふと笑みを浮かべた。

「いい気分転換にはなりましたね。毎日天理の中で大人しくしていないといけないので暇だったんですよ。」

ディアナの笑顔からして、やはり楽しかったのだろう。素直に言えばいいのに。

「まったく、振り回される方の気持ちにもなってみろっていうんだ。ボクは家でゲームしてる方が楽しかったよ！」

「な!?!」

後部座席真ん中のテーブルを強く叩いてディアナが立ちあがった。「あなたはまたそんなことを言って、逆に放っておかれるこちらの身にもなってください!!」

「お、お前、危ないぞ!!」

ここは車内だ。天井も高くないし、今は高速道路を走っているのだ。カーブとかが来たらどうする!

「だいたいあなたは何人も人を恋に落としておいて無責任すぎるんです。少しは後のことも考えて……」

ボクはなんでこんなところでまでディアナに説教されているんだ? 悪いがそんな説教聞く気はない。地獄からの操作で攻略の記憶は抹消されるんだからどうしようもないだろう。

とか思っていると、前座席の真ん中についているカーナビの自分の位置を示すアイコンの先が大きく曲がっていることに気がついた。

「おい、ディアナ!カーブだぞ、座れ!」

「え!?!」

とか言ってるうちに道に沿って右に曲がった。慣性で右にいるディアナは左のボクの席に倒れてきて……

「……きゃあ!?!」

「うわあ……!?!」

咄嗟にディアナを受け止めるが、シートベルトに妨げられて上手く受け止められなかった。

右手がディアナの腰のあたりを、左手がディアナの胸の少し上あたりを受け止める。そして結局ディアナの頭が左側のドアにぶつかってしまった。

「あいたた……、すいません。……!?!」

ディアナが顔をあげようとするモーションが見えたので、なんとなく反射的にそっぽを向いてしまう。けして胸が当たっているなどという事はない。ないからな！

「す、すいません。い、今どきますから……！」
とりあえず触ってしまったっているいろんなところから手を放す。

しかしその瞬間、ディアナの顔がこちらを向いた。その顔は真っ赤に変化していて、どうやら動かしたことで触れていたことが分かってしまったらしい。

なるほど。動かさない方がいい時もあるのか。

「わ、私に触れないでください！」

「ぶへっ!？」

どうやってパンチを繰り出したのかは分からないが、そのせいで身体を支える腕がなくなり、ディアナの身体が本当にボクの身体に倒れてしまった。

太ももの辺りに柔らかい感触がする。そしてディアナの顔はさらに朱くなっていつてしまう。

「は、早く離れる!!！」

「分かっていますよ!!！」

ディアナは今度こそちゃんと元の位置に戻り、次がないようにとしっかりとシートベルトを着用した。

「……そろそろ到着するようですね。先ほどの大きなカーブは出口のものだったみたいですよ。」

「ああ、そうだな。もう鳴沢市についたみたいだな。」

高速道路を降りるとすぐに見慣れた街並みが見えた。まあ、夜の街なんて興味もないが……。

それを見て嬉しそうな顔をするディアナを可愛いとも思わない。

まったく……。変わらない風景なんて見て何が楽しいんだ。

「それにしてもそろそろ天理は寝る時間ですね。」

それはそうだ。時刻はもう十一時を回っているのだ。まあ、ボクはそんな時間に寝た事がないが……。

そして僕たちが家に着く頃には十一時半近くになっていた。
着いてみると起きているのはボクと天理^{ディアナ}だけで、あとの皆は車内
で熟睡してしまっていた。

まあ、それはそうかもしれない。ボクはずっと気絶していたから
眠る暇はなかったし、天理とディアナもずっとボクの面倒を見てく
れていたのだから眠れなくて当然だ。

寝むそうではあるが……。

「それでは私たちはこれで……。」

「桂馬くん、おやすみ。」

あまり大きな声を出してはいけけないのでとりあえず軽く手を振っ
ておく。

天理が家に入ったのを見てからとりあえずまずはエルシイとハク
アを叩き起こした。

「にやんですか？……つあ！もう着いてます〜！」

「あら、もう着いたの？もう少し寝たかったわ。」

悪魔二人組は二人して猫のように目をこすりながら起きてくるが、
とりあえず車の外に放り出す。まあ、夏だし寒いことはないだろう。
「ほら、こいつらを家まで送るの手伝え！」

「……私帰ってもいいんじゃない？」

まあ、この前みたいに羽衣で送っていくわけじゃないし、起きた
やつから帰るでもいいんだがな……。

いや、それでいいのか。

「エルシイと協力して皆を起こして帰らしてくれ。レンタカー返さ
ないといけないんだってさ。」

「……そういうことなら仕方ないわね。」

それだけ命令して、ボクは家の中に入っていく。……ほぼ一日中
誰もいなかった家は靴下を履いていても少し冷たかった。

母さんはまだ車の中に残っているし、家の中にはまだボクしかい
ない。

カフェの冷蔵庫から適当な飲み物を取って一気に飲み干してから、自分の部屋へと上がる。

「あ、PFPカフェに置きっぱなしだった……。」

階段を二、三段上がった辺りでその事を思い出し、カフェに引き返す。

電気をつけなければいけないほどでもない、スイッチの類はスルーした。

しかしテーブルのうちの一つからPFPを拾い上げようとする途中、誰かの手に当たった。

「ん？誰だ？」

「あ、神にーさま？」

どうやらエルシイだったようだ。まあ、この細い指の感覚とかでそんな気はしなくてもなかったが。

「どうしたんだ？」

「神にーさまにゲームを返すの忘れてたから、返そうと思ったんですけど……。」

「いらぬ世話だったな。ボクが忘れていても思ったのか？」

まあ、じゃっかん忘れかけてはいたが……。ボクもそれなりに疲れているみたいだな。

「う。少しは神にーさまの役に立ちたいです……。」

「まだまだだな。」

ボクはいくつか置いてあるPFPを拾ってポケットに入れていきながらそう言う。

エルシイが役に立つ時はいつ来るのだろうか、それは本当に神のみぞ知ると言った感じだな。

「あ、そういえば神にーさま。帰ってからちゃんとたいていまって言いました？」

言っていないが、帰った時に誰もいなかったのだから別にいいだろう。

「……やっぱり言ってないんですね！人がいなくてもちゃんとかわ

なくちゃだめですよ！」

「分かったよ。言えばいいんだろ？」

「そうです、言えばいいんです。挨拶ですから！」

まったく、ボクがそんなこと言っただって感情の一つもこもらないぞ。

しかしここで言わなければボクが解放されるのはもう少し後になつてしまうだろう。

「……ただいま。」

エルシイはそれを聞いてニコリと笑って、PFPを拾い上げ……

「おかえりなさい、神にーさま！」

そう言ってPFPをボクに返した。

終わり

(後書き)

途中で文章の感じが変わってしまったかもしれませんが
でもあまり気にしないでくださいw

そしてなんだか状況を説明しただけの分みたいになってしまった。
こんな文で萌えてくれたりするんだろうか？w

その辺めちやくちや聞きたいですw
感想でよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4194ba/>

神のみぞ知るセカイ ~女神と悪魔と水着~

2012年1月11日01時57分発行